

平成20年度調査研究「教科等で考える異校種間の連携の工夫」

1 研究の趣旨

子どもたちに「確かな学力」を身に付けさせるためには、小・中・高等学校の12年間を見通した系統的な指導方法を確立することが重要である。

そこで、本調査研究では、教科等における異校種間の連携の望ましい在り方を探るため、教科ごとに研究協力委員相互の授業参観を実施し、それに基づいて、今後の教育活動の改善に役立つ事例提案を行うこととした。

2 研究の内容

- (1) 各校種の授業参観を通して連携の在り方を探る
- (2) 小中高の連携についての事例提案

3 研究の方法

研究事業の実施期間は平成19・20年度の2か年とし、下記教科において、研究協力委員小・中・高等学校6名（各2名）を委嘱し、所員と協力して調査研究を行う。

- 平成19年度実施教科（4教科＋道德）
国語、社会、地歴・公民、技術・情報、外国語、道德
- 平成20年度実施教科（5教科＋総合的な学習の時間）
算数・数学、理科、音楽、図画工作・美術、美術・工芸、家庭、総合的な学習の時間

4 研究計画

平成20年度

回	開催時期	内 容
第1回	5 / 23 (金)	・ 委嘱状交付 ・ 全体会（趣旨説明） ・ 講義「教科等で考える異校種間の連携の工夫」 - 社会、地理歴史・公民 - 総合教育センター指導主事 吉澤 達也 ・ 教科別会議（研究内容及び方向性の確認、日程等確認）
第2回	6月	・ 授業参観及び研究協議
第3回	9月	・ 授業参観及び研究協議
第4回	10月 ～11月	・ 授業参観及び研究協議 ・ 指導案の検討
第5回	12月	・ 研究のまとめ、報告書の分担、作成
	1月	・ 報告書の完成
	3月	・ 報告書のセンターHP掲載

5 研究協力委員

平成20年度 「教科等で考える異校種間の連携の工夫」(二年次) 協 力 委 員 名 簿

	教 科	学 校 名	氏 名	担当所員
1	算数・数学	川口市立青木中央小学校	渡邊 恵	池田 孝司 西野 博
2	算数・数学	戸田市立戸田第一小学校	杉森 雅之	
3	算数・数学	川口市立芝東中学校	阿部 弘之	
4	算数・数学	杉戸町立広島中学校	佐々木 力也	
5	算数・数学	県立浦和工業高等学校	小久保 守	
6	算数・数学	県立所沢高等学校	石田 昌子	
7	理 科	伊奈町立南小学校	安川 純一	川音 孝夫 金室 紀夫
8	理 科	羽生市立須影小学校	増田 貴光	
9	理 科	上尾市立大谷中学校	関根 潤	
10	理 科	県立伊奈学園中学校	庄村 直子	
11	理 科	県立和光国際高等学校	山田 美和	
12	理 科	県立伊奈学園総合高等学校	吉川 摩耶	
13	音 楽	上里町立賀美小学校	山崎 香苗	白井 裕一
14	音 楽	入間市立豊岡小学校	奥泉 徹	
15	音 楽	鴻巣市立鴻巣中学校	都木 雅之	
16	音 楽	蕨市立第二中学校	北添 郁朗	
17	音 楽	県立蕨高等学校	加藤 薫	
18	音 楽	県立岩槻北陵高等学校	岩瀬 烈	
19	図画工作・美術, 美術・工芸	川口市立上青木南小学校	稲垣 亮	武藤 篤美 碓 秀年
20	図画工作・美術, 美術・工芸	狭山市立堀兼小学校	杉浦 ゆうこ	
21	図画工作・美術, 美術・工芸	鴻巣市立赤見台中学校	石塚 哲也	
22	図画工作・美術, 美術・工芸	飯能市立飯能第一中学校	亀山 幸子	
23	図画工作・美術, 美術・工芸	県立芸術総合高等学校	田村 裕介	
24	図画工作・美術, 美術・工芸	県立朝霞高等学校	小関 良太	
25	家 庭	春日部市立粕壁小学校	橋本 美代子	榊原 久子 市村 洋子
26	家 庭	羽生市立手子林小学校	三ヶ尻 陽子	
27	家 庭	鷲宮町立鷲宮中学校	鴨田 紋子	
28	家 庭	越谷市立栄進中学校	土屋 和加子	
29	家 庭	県立春日部女子高等学校	河森 明子	
30	家 庭	県立三郷高等学校	横張 亜希子	
31	総合的な学習の時間	所沢市立北小学校	藤田 恵子	小川 聖子
32	総合的な学習の時間	幸手市立さかえ小学校	筒井 文	
33	総合的な学習の時間	東松山市立北中学校	須長 健	
34	総合的な学習の時間	羽生市立西中学校	向後 健一	
35	総合的な学習の時間	県立不動岡高等学校	佐々木 裕子	
36	総合的な学習の時間	県立浦和東高等学校	鈴木 将道	

異校種の連携における各校種の実態把握

本調査研究を進めていくにあたり、異校種の連携について各学校の先生方がどのように捉え、また、どのような実践が行われているかを把握するためアンケートを実施した。研究協力委員の所属する学校の教員にアンケートの協力を依頼し、その結果を分析しまとめた。

調査期間：平成20年9月16日～10月31日

回答者数：小学校 213人、中学校 172人、高等学校 199人

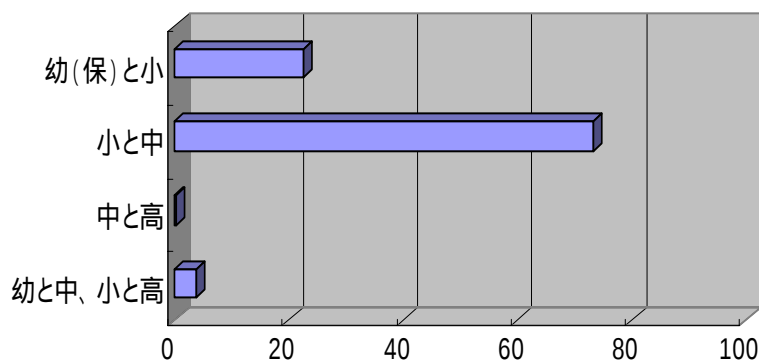
1 あなたが必要と考える「異校種の連携」を下記の中から1つ選んでください。

幼稚園（保育園）と小学校

小学校と中学校

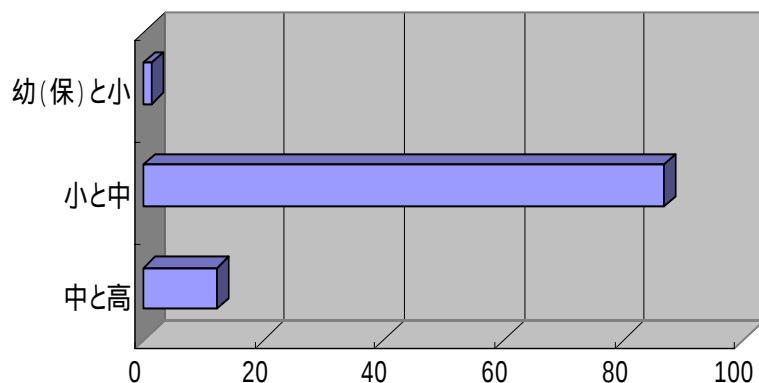
中学校と高等学校

小学校の教員の回答

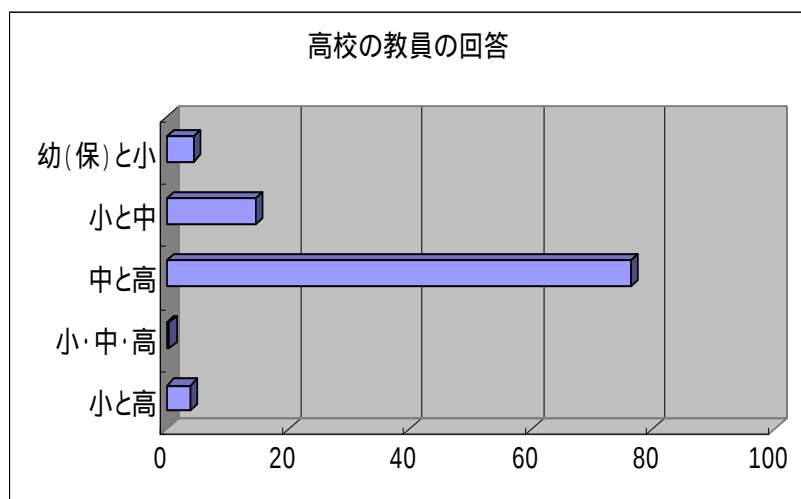


小学校	幼稚園（保）と小	22.5%
	小と中	73.2%
	中と高	0.5%
	幼と中、小と高	3.8%

中学校の教員の回答



中学校	幼稚園（保）と小	1.2%
	小と中	86.6%
	中と高	12.2%



高 校	幼(保)と小	4.5%
	小と中	14.6%
	中と高	76.4%
	小・中・高	0.5%
	小と高	4.0%

「小と中」の連携が必要と考える小学校の教員が 73.2%、中学校の教員は 86.6%である。高校の教員は「中と高」の連携が必要と答えている割合が 76.4%である。小・中学校の教員は義務教育における連携、高等学校の教員は入学してくる生徒の在籍する中学校との連携が必要と答えている。

今回のアンケートのその他の回答として、小学校から「幼と中」、「小と高」、高校から「小・中・高」、「小と高」という回答があった。

2 あなたは、「異校種の連携」について、今後、各学校での取組が必要だと思いますか。必要と思った項目を下記の中から選んでください。（複数回答可）

授業改善

生徒指導

進路指導・キャリア教育

特色ある学校づくり

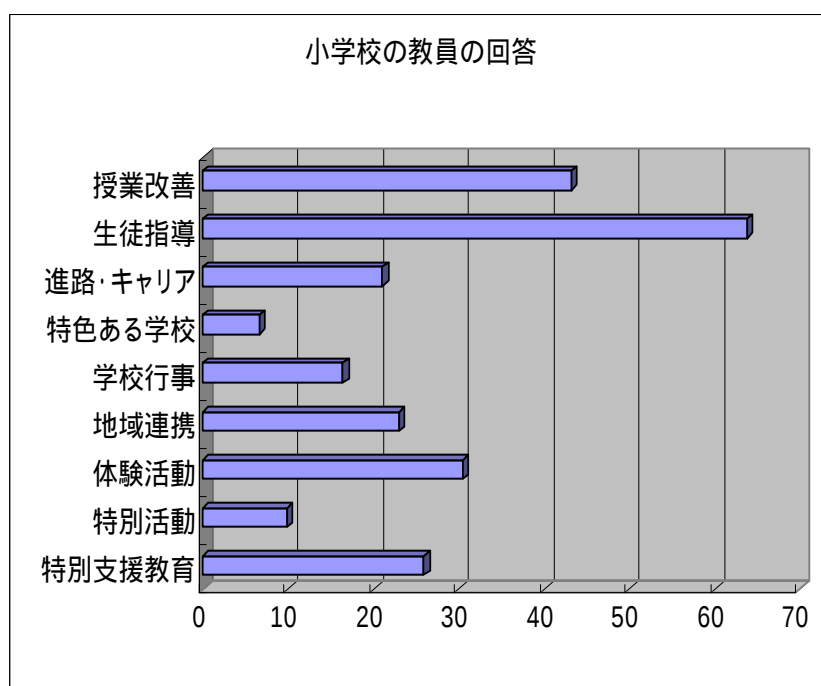
学校行事

地域連携

体験活動

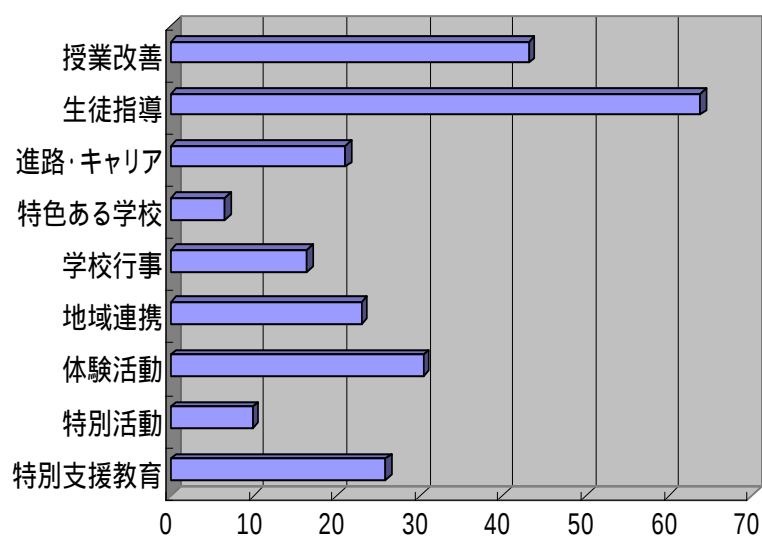
特別活動

特別支援活動



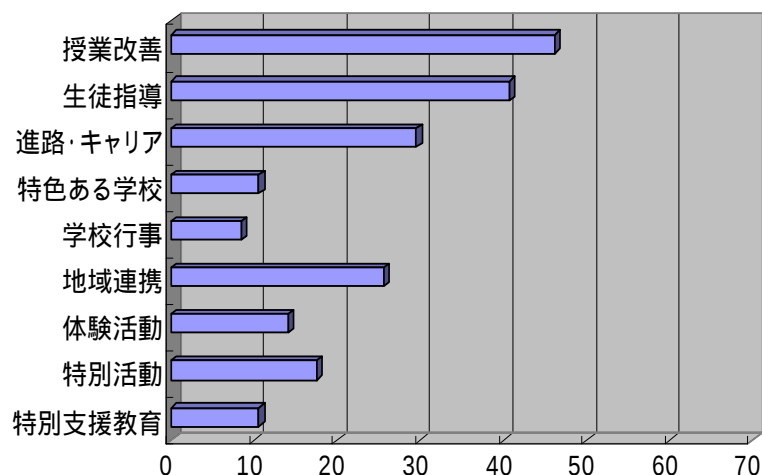
小学校	授業改善	43.2%
	生徒指導	63.2%
	進路・キャリア	21.1%
	特色ある学校	6.6%
	学校行事	16.4%
	地域連携	23.0%
	体験活動	30.5%
	特別活動	9.9%
	特別支援教育	25.9%

中学校の教員の回答



中学校	授業改善	54.7%
	生徒指導	75.6%
	進路・キャリア	23.3%
	特色ある学校	3.5%
	学校行事	15.1%
	地域連携	20.3%
	体験活動	18.0%
	特別活動	12.2%
	特別支援教育	22.7%

高校の教員の回答



高 校	授業改善	46.2%
	生徒指導	40.7%
	進路・キャリア	29.6%
	特色ある学校	10.6%
	学校行事	8.5%
	地域連携	25.6%
	体験活動	14.1%
	特別活動	17.6%
	特別支援教育	10.6%

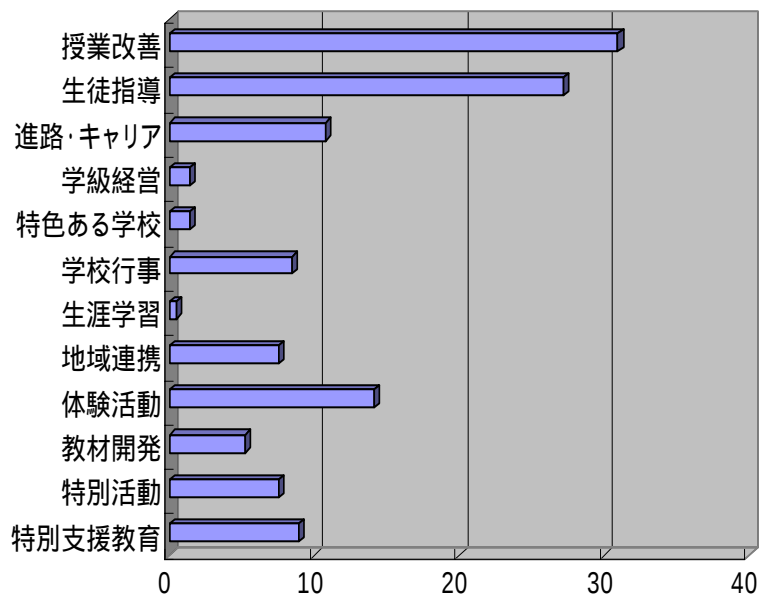
「今後、必要と考える連携」として小・中学校では、「生徒指導」の割合が高く、次に「授業改善」となっている。割合としては若干異なるが、必要と考える連携の項目の順位が、小学校と中学校では同じになっている。「生徒指導」の割合が高くなっているのは、小・中学校がほぼ同じ地域の児童・生徒が入学することから、発達の段階に応じて連携を図りながら、9年間を見通し子どもたちを教育する必要があると考えている教員が多いからではないかと考える。

高校では、小・中学校とは逆に「授業改善」次に「生徒指導」、ついで「進路・キャリア」の順になっている。現在、高校の課題の一つとして「授業改善」が挙げられる。各校において、授業公開や授業アンケート、異校種への出前授業等を通し、教員の授業力向上に取り組んでいるところである。そのため、小・中学校と異なり「授業改善」の割合の方が高くなっていると思われる。

3 あなたの勤務校や近隣の学校における「異校種の連携」の実践事例を下記の項目の中から選んでください。（複数回答可）

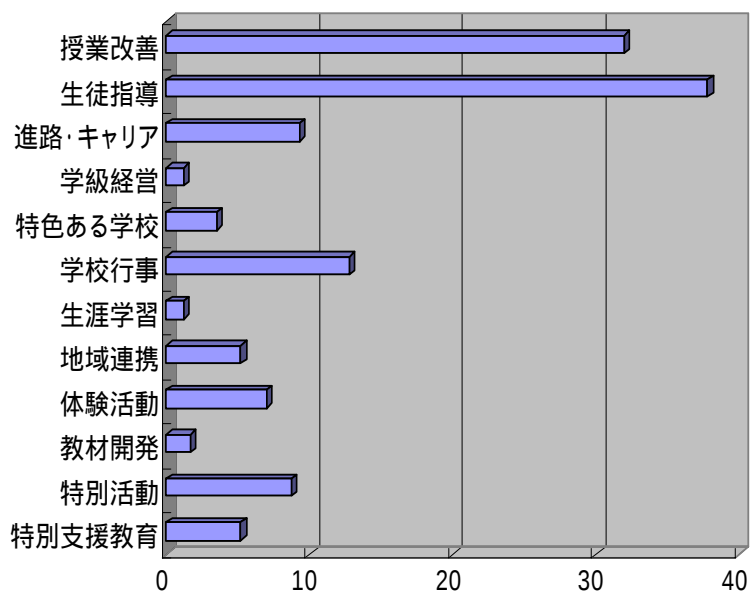
授業改善 生徒指導 進路指導・キャリア教育 学級経営
 特色ある学校づくり 学校行事 生涯学習 地域連携
 体験活動 教材開発 特別活動 特別支援教育

小学校の教員の回答

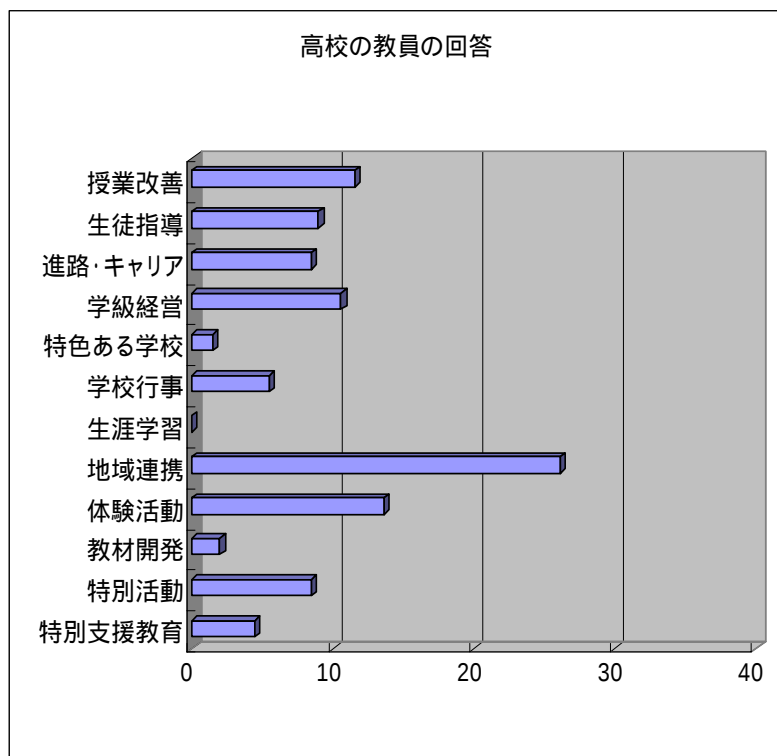


小学校	授業改善	31.0%
	生徒指導	27.0%
	進路・キャリア	10.8%
	学級経営	1.4%
	特色ある学校	1.4%
	学校行事	8.5%
	生涯学習	0.5%
	地域連携	7.5%
	体験活動	14.1%
	教材開発	5.2%
	特別活動	7.5%
	特別支援教育	8.9%

中学校の教員の回答



中学校	授業改善	32.0%
	生徒指導	37.8%
	進路・キャリア	9.3%
	学級経営	1.2%
	特色ある学校	3.5%
	学校行事	12.8%
	生涯学習	1.2%
	地域連携	5.2%
	体験活動	7.0%
	教材開発	1.7%
	特別活動	8.7%
	特別支援教育	5.2%



高 校	授業改善	11.6%
	生徒指導	9.0%
	進路・キャリア	8.5%
	学級経営	10.6%
	特色ある学校	1.5%
	学校行事	5.5%
	生涯学習	0%
	地域連携	26.1%
	体験活動	13.6%
	教材開発	2.0%
	特別活動	8.5%
	特別支援教育	4.5%

異校種の連携の実践事例としては、小・中学校と高校では実態が異なっており、小・中学校では、「授業改善」及び「生徒指導」の割合が他より高くなっている。高校では、「地域連携」の割合が高く、ついで他の「授業改善」「生徒指導」「進路・キャリア」「学級経営」「体験活動」「特別活動」については、約１割という結果であった。

具体的な実践事例については以下に記す。

4 実践事例の中から具体的な取組を記入してください。

小学校

授業改善

小中における授業公開、小中の国語、算数 - 数学、体育における連携、中高の教員による出前授業、英語活動における小中連携

生徒指導

幼小連絡協議会（情報交換）、小中連絡協議会（情報交換）

進路・キャリア

中学校の教員が小５・６年生に中学校生活について講話

学校行事

小中クリーン作戦、体育祭における高校陸上部の生徒による指導

体験活動

生活科において幼稚園・保育園児に昔遊びを教える

教材開発

小中英語における９ヶ年を通したカリキュラムの作成

特別活動

中学校教員による小学校金管バンドの指導、音楽クラブと中学校吹奏楽部との合同練習及び

コンサートの実施、
特別支援教育
養護学校との交流

中学校

授業改善

小中における授業公開、小学校との理科、算数 - 数学における連携、中高教員合同の授業研究会、英語活動における授業研究、高校の教員による出前授業

生徒指導

小中連絡協議会（情報交換）、学区内（小中）での生徒指導等の情報交換、生徒指導主任間の連絡協議、非行対策等の指導事例研究及び冊子の発行

進路・キャリア

地元高校の教員による進路講話、中学校の教員が小学校に中学校について説明

学校行事

文化祭・体育祭等の中高合同開催、中学校の吹奏楽部による小学校の音楽祭への出演

特別活動

部活動（サッカー部、吹奏楽部）の技術指導における高校との連携、職場体験活動における小学校での体験

特別支援教育

特別支援学級間における交流

高等学校

地域連携

中高連携委員会（情報交換）、スキップシティ（映像関係）との連携

授業改善

小中学校への出前授業、数学科における市内中学校との研究授業

生徒指導

生徒指導における小中高の連携（情報交換）

進路・キャリア

高3生が中3生に高校生活や進路について講話、高大連携（高校生が大学の授業を聴講）

学校行事

硬筆展や書き初め展において市内小中高 17 校が連携し開催、高校文化祭で小中高による自画像展を開催

体験活動

小学生との交流授業

特別活動

高校生が小学校において授業の補助、部活動（陸上部）における技術指導

特別支援教育

養護学校との交流、J R C 部員が養護学校において交流

異校種の連携における実態調査の実践事例が多い項目として、小学校・中学校では、「授業改善」と「生徒指導」、高等学校では「地域連携」であった。

「授業改善」では、教科の国語、算数—数学、体育における連携、授業公開及び授業研究会、出前授業、さらに新学習指導要領の改訂を受け小学校5年生から導入される外国語活動への取組が行われている。「生徒指導」では、従来から行われている幼小連絡協議会、小中連絡協議会における情報交換や生徒指導主任間の連絡協議等があげられている。昨今小1プロブレム、中1ギャップが指摘されていることもあり、今後も内容の充実とさらなる連携が求められている。

高等学校では、生徒の多様な興味・関心や進路等に対応できるよう、普通科、専門学科及び総合学科の各学科や全日制・定時制・通信制の各課程が設置されている。生徒が学ぶべき内容を様々な方法で指導していかなければならないことから、「授業改善」の必要性を認識しつつも、現状では「地域連携」が多く行われている。

○ まとめ ○

平成20年1月に示された中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」では、「それぞれの学校段階において、その役割をしっかりと果たすことが何よりも重要であるが、それに加え、教育課程の改善に当たっては、発達の段階に応じた教育課程上の工夫の観点から、学校段階間の円滑な接続に留意する必要がある。」と学校種間の連携の必要性が示されている。そのため、児童生徒の発達の段階における特性や各校種間の教育課程や内容を相互に理解し、指導の継続性や接続の円滑化を図ることが重要になってくる。

今回のアンケートを通して、異校種における連携について、各校種の教員の意識と実践事例を把握することができた。小・中学校（義務教育）と高等学校の設置目的や児童生徒の実態が異なることから、連携の実際について差が見られたが、しかし、小・中・高等学校に共通する視点として「授業改善」における連携の必要性を確認することができた。

この後の各教科等の研究では、小・中・高等学校の連携を図り「生きる力」の柱のひとつである「確かな学力」を身に付けさせる方策である「授業改善」について事例提案していく。